

Freshman Seminar の教材としての 『ピーターラビットのおはなし』

三 上 紀 史

1

私は現在（2003年）英米文学科1年生の科目 Freshman Seminar の教材として、ビアトリクス・ポター（Beatrix Potter, 1866-1943）の『ピーターラビットのおはなし』（*The Tale of Peter Rabbit*）を使っている。私がこれを教材として使用することにしたのは、次のような理由による。

2000年以来、河野芳英先生を中心とするスタッフの尽力によって、ビアトリクス・ポター関係の資料が大量に収集され、大東文化大学図書館のポター関係資料の所蔵数は全国一となった。また、2002年8月の新宿高島屋の「ピーターラビット展示会」を皮切りに、全国の数か所で、ポター関係の展示会が開催され、大東文化大学図書館所蔵の関係資料が、中心となる展示物として展示された。私が驚いたのは、その入場者の数である。新宿高島屋の展示会では、2週間で8万人以上の人が入場したと聞いた。私も新宿高島屋の展示会をのぞいてみて、その入場者が多いのに驚いた。私はまず「ピーターラビット」の人気の、いったいどこにあるのかを知りたくなった。これが「ピーターラビット」を教材として使ってみようと思った第一の理由である。

私はそれまで、ビアトリクス・ポターの作品を読んだことはなかつ

た。私は児童文学にいくらか興味をもっているのですが、世界の児童文学の名作をいくつか読んできた。しかし、私はビアトリクス・ポターには、それまで何の関心も持っていなかったのである。児童文学の作品は難解でありまいな象徴的意味をもっていることが多い。それは作者が、子どものために書きながら、知らないうちに自分の本質的部分をさらけ出すからである。幼児性の中には、人間の成長の段階で対決しなければならない要素を含んでおり、それは成人に達した人間の精神に、ある痕跡を残し、精神生活に複雑な問題を生じさせる。私が児童文学を読みはじめたのは、その点に興味を持ったからである。もしかしたら、そういう問題も「ピーターラビット」の中に見つかるかもしれない、と私は思った。これが第二の理由である。

関係資料の所蔵数が全国一でありながら、それに関して授業では教えられていないのは不自然である。本学の英米文学科のカリキュラムの中に、正式に「ピーターラビット」が組み入れられる前に、私は実験的に学生たちに教えてみようと思った。これが教材としてふさわしいかどうか、学生たちの反応を知りたかったのである。これが第三の理由である。

いくつかの不安材料があった。私はビアトリクス・ポター研究の専門家でもないし、児童文学の研究家でもない。それなのに、まだよく知らない作者と作品について、教室で教えてよいものかどうか。学生たちは、子どもの絵本を教科書として使うことに抵抗を感じないかどうか。教材として、はたして適当であるかどうか。そして、最大の問題は、私自身がこれを面白いと思うかどうか、ということであった。つまらないと思うものを教えるのは苦痛であるだけでなく、学生に対しても失礼であり、効果もあがらない。

私はさっそく河野芳英先生から教科として適当な本を1冊もらって読んでみた。その本は、F. Warne社から出版されている *The Complete Ad-*

ventures of Peter Rabbit という本である。その中には、ピーターの登場する4つの物語，“The Tale of Peter Rabbit”，“The Tale of Benjamin Bunny”，“The Tale of the Flopsy Bunnies”，“The Tale of Mr. Tod”が収録されている。私はそれを通読し、まず、むずかしい単語がところどころに使用されているのに気づいた。なかには、古代サクソン語や方言が使われていて、Webster の Third Edition の辞書を引いて、はじめて理解した単語もあった。しかし、全体からみて、Freshman Seminar の教材として、やさしすぎもしないし、むずかしすぎもしない内容だと感じた。そして、絵が話を具象化したり、想像をひろげたりする不思議な働きをしていることに気づいた。

Freshman Seminar はもともと「導入教育」の科目として設置されている。担当者は学生たちのアカデミック・アドバイザーを兼ねなければならない。「導入教育」は全国の大学で真剣に取り上げられながら、全般的にみて、効果があがっていないことが報告されている。普通の演習になってしまうのである。「導入教育」と「教材」をどう結びつけるかは、私にとっても大きな問題であった。この問題を、私は現在、十分解決しているとはいえない。それについて述べるのは別の機会にゆずることにして、ここでは、『ピーターラビットのおはなし』に対して、学生たちがどう反応したかについて報告したいと思う。

私の担当の Freshman Seminar を履修している学生は18名である。彼らは機械的に割り当てられて履修している。私は最初の授業で、学生の一人一人に自己紹介をさせ、どういうものに興味をもっているかを述べさせた。それから、なぜ私が教材として『ピーターラビットのおはなし』を選んだかを説明した。不本意入学者を本意入学者に変えるためには、学生たちに自分が在籍している大学が、どういう大学であるかを知らせる必要がある。私は、本学がビアトリクス・ポター関係の資料の所蔵数

については全国一であることを強調した。授業では、まず朗読テープを聞き、学生に輪読させ、ときどき絵の意味をたずねた。ひとつの話を読みおえると、学生一人一人に感想を述べさせた。それが終わると、学生全員に文章の一部を朗読させ、発音の練習を行った。読みすすんでいくうちに最初の不安は消え、『ピーターラビットのおはなし』は、この学生たちに適しているのではないかと思うようになった。ちなみに、前期の終わりに実施された授業評価で、「教材の適切性」については、解答者15名のうち、「強くそう思う」が8名、「そう思う」が6名、「どちらともいえない」が1名で、平均4.5であった。学生たちは、この教材が適切であると思っている、とみてよいだろう。

読んでいくうちに、私は物語の中に、それまで気づかなかったことを発見することもあった。たとえば、次のようなことである。

1. 動物を擬人化することは、動物であると同時に人間であることである。この矛盾がどう描かれているのかは興味のあるところだったが、この不自然さは、子どもの世界では、むしろ自然であるように思える。
2. 絵は文章の説明ではなく、絵と文章が別々で、しかもそれが結びついて一つの効果をあげている。文章にはない内容が絵に描かれていることもある。たとえば、『ベンジャミンバニーのおはなし』の中で、文章ではバニー氏が、息子のベンジャミンだけをむち打ったかのように書かれている。しかし、絵ではピーターの方がむち打たれている。つまり、2匹ともむち打たれたのである。このことを私は学生に指摘されてはじめて気づいた。
3. 挿絵には、文章を書いた本人が描く場合と、別の画家が描く場合がある。「ピーターラビット」の物語は、文章も挿絵もビアトリクス・ポターがかいたものである。このことから、ポターの意図

がどこにあるかをさぐることで、さらに重要になる。

4. 絵は文章ではわからないものを理解させるのに役立つ。イギリスの湖水地方の風俗習慣や物などは、言葉だけでは、どんなものかわからない場合がある。絵はそれがどんなものであるかを読者に理解させる。たとえば、marrows (ペポカボチャ) や window-sill (窓台) がどんなものであるかは、『フロプシーの子どもたちのおはなし』の中で、フロプシーの一番年下のうさぎが、マグレガーさんの家の窓台の上で、ペポカボチャをぶつけられる絵を見れば、すぐそれを理解することができる。知らないものを文章から想像することはむずかしい。また、不正確な想像は理解のじゃまになることもある。学生たちに感想をきいたときに、「鮮明に描かれた野菜の絵が好きだ」と言った学生がいた。イギリスの野菜と日本の野菜のちがいは、絵によって鮮明になる。
5. ポターは子どもの心理だけではなく、大人のくだらなさを風刺的に描いている。たとえば、大人になったピーターやベンジャミン、Mr. バウンサー・バニー、Mr. トッドや穴ぐまのトミーなどによって描かれているのがそれである。
6. ポターは、マグレガーさん夫妻などの人間を登場させて、擬人化した動物の目を通して人間を見ている。動物が擬人化されていることは、動物と人間が同じレベルで物語られているということである。しかし、マグレガーさん夫妻は、擬人化されたうさぎを、ほんもののうさぎとしか思っていない。つまり、うさぎは農作物を食いあらず動物であり、毛皮をとってマントの裏地にしたり、肉をパイにしたりする動物にすぎない。このために、普通の農夫にすぎないマグレガー夫妻が、きわめて残酷な人間であるような印象を読者に与える。このように、動物の目線で人間を見ること

によって、動物が自然の一部として保護されるべきであるという、ポターのメッセージが暗示されている。ところが、ある学生は「動物たちを愛した作者のあたたかい目線は、いたるところに感じられるので、読者の目に残酷にうつることはありません」と感想をのべた。これもまた正しい読み方のようにも思える。

今年の夏休み中の9月9日(火)に、私は上福岡の読書グループ「ふみの会」に招かれて、『ピーターラビットのおはなし』について話をした。このグループは毎月1回例会を開き、自分たちが指定した本を読んできては討論をしている。本はすべて日本語で書かれたものか、あるいは日本語訳のものを使っている。この会はもう30年以上も続いている。私は20年ほど前から、毎年1回9月に招かれて講義をしているのである。私があらかじめ指定した本を、全員が読んできて討論をするのである。今年、私は『ピーターラビットのおはなし』の1篇だけの日本語版を指定した。30年前は20名近くいたメンバーは、高齢化によって年々少なくなり、今は8名になっている。メンバーはすべて、もと文学少女の主婦たちである。ところがこの日は、20数名の臨時メンバーが加わっていた。今回のセミナーは公開されたのである。臨時メンバーの中には、『ピーターラビットのおはなし』を子どもたちに読んできかせている幼稚園の先生が2人含まれていた。私は主に一つ一つの絵の解釈について議論していった。そのとき最も問題となった絵は、フロプシイ、モプシイ、コトンテールの3匹のうさぎが、黒イチゴを取っている絵である。3匹が着ていたピンクの服が、そばにぬぎすてられている。私はこの絵を、それほど注意をせずに読みすごしていた。ある女性が指摘して、「このうさぎたちは、なぜ服を脱いでイチゴを取っているのでしょうか」と質問した。この絵では、3匹のうさぎが二本足で立って、イチゴをとってかごの中に入れている。動物と人間の中間の位置で描かれて

いるように見える。私は、これをどう考えるかについて、出席者に問いかけてみた。すると二つの意見が出た。一つは、「3匹は動物のうさぎにかえてイチゴをとっている」、もう一つは「お行儀の良い3匹のうさぎなので、服をよごしてはいけないと思っているのだ」という意見である。私はどちらの解釈でもよからう、と答えておいた。

後期のはじめのFreshman Seminar の授業で、すでに読みおえていたこの部分について、学生たちにどう考えるかを質問してみた。彼らは何も答えなかった。何も答えなかったことを、ここでとやかく言うつもりはない。私が言いたいのは、このように、作者の意図をおしはかりながら解釈する面白さが、ポターの絵本にはあるということである。

私自身のくわしい解釈は別の機会にゆずることにして、ここで学生たちの感想をきいてみることにしたい。以下は“*The Tale of Peter Rabbit*”と“*The Tale of Benjamin Bunny*”を読みおえたところで、夏休みの課題として出したレポートの抜粋である。Freshman Seminar の受講生18名全員に、学籍番号順に一言ずつ発言してもらうことにする。私はヒントとして、五つの点から考えてみることを示唆しておいた。それは、1. 面白いと思った部分、2. 絵と文の役割、3. 絵を見て気づいたこと、4. ピーターとベンジャミンの性格、5. 動物の擬人化の意味、である。ただし、これらにこだわらず、何を書いてもよいことにしておいた。

2

「マグレガーさんがピーターを見つけて、追っかけるシーンの絵で、私ならマグレガーさんの怒っている表情をもっと強く描いて、スリル感を出したい、と思った」(石川博章)

「このお話のおもしろいと思ったところは、絵の中のピーターを見れ

ば、ピーターの心の中まで分かってしまうところです。たとえば、『ベンジャミンバニーのおはなし』のp.28の3つの絵を見ると、マグレガーさんの庭に再び入り、またマグレガーさんにつかまってしまうのを恐れて、不安でびくびくしているピーターの様子がよく分かります」(田口知美)

「ポターはうさぎという動物を、人間として考えていたのではないのでしょうか。幼少時代、なかなか友達ができないポターにとって、うさぎはポターの一番の良き理解者だったのではないかと思います。だからポターは、うさぎを自分と同じ存在だと感じ、人間のように泣いたり、2足歩行にしたりしたのだと思います。けれども本を読んだり、絵を見たりすると、それが普通のように思ってしまうのはなぜでしょうか。ポターの世界にのめりこんでしまうのです」(山田瞳)

「『ピーターラビットのおはなし』には、文章に書かれていないたくさん謎が存在する。たとえば、マグレガーさんとは一体何であるかということである。ピーターラビットのうさぎは、服を着て2足歩行をして「人間」の役を演じている。マグレガーさんは、ピーターたちの一家から恐れられている。人間にとって怖いものとは何であろうか。それは人間である。マグレガーさんは怖い人間の象徴である。」(吉田稔)

「うさぎが人間とうまく共存している。うまくいくといっても仲良くというわけではなく、ヒトとうさぎが別ものであるという印象を与えることなく、一定の距離を保って共存している。うさぎが擬人化されて登場することは、単にかわいさを読者に感じさせるだけでなく、それが人間だったらリアルすぎる現実感に、ワンクッションを入れる役目をはたしている」(小林貴裕)

「挿絵のなかで、小鳥がよく登場します。それはピーターの母をあらわしているとか、キリストの象徴だとか、いろいろな説があるようです

が、私が思ったのは、この小鳥はビアトリクス・ポター本人を表しているのではないかと、ということです。その姿は、そっと見守っている母親的意味あいも、もちろんあると思いますが、単純に自分のシンボルマークということもありえるのではないのでしょうか」(長島百枝)

「ピーターのママのミセスラビットが、パンを買いに行く絵で、彼女がおしゃれをしている姿がかわいい。今までは青い普段着だったのに、いきなり赤い服になっていて、しかもハットまでかぶっている。こんなうさぎの世界があるのかもしれないと思ってしまうほど、服がうさぎに合っている。動物に服を着せることで、動物がとても身近に感じられる。動物を身近に感じることで、生きものや自然を大切にしようという気持ちになると思う。作者の意図もそこにあるのではないだろうか」(高篠由美)

「大学に入学して、フレッシュマンセミナーの講義を受けるまで、私はピーターラビットの本は一度も読んだことはなかったけれども、なんとなくピーターラビットのことは知っていました。初めて読んでみて、おもしろいと思ったところは、お母さんがピーターたち4人の子どもに話しかけている絵です。ピーター以外の子どもたちは、お母さんの方を見てしっかり話を聞いているのに、ピーターだけがそっぽをむいています。この絵から、ピーターはやんちゃでいたずらっ子なんだなあと思いました」(今井友香)

「私はピーターラビットの絵が、小さい頃からとても好きでした。どの絵も、すごく優しくてかわいらしくて、作者がどれほど動物や自然を愛しているかがよく伝わってきました。ですが、絵の人气が一人歩きしてしまって、ピーターラビットの話自体には詳しくない人も多いと思います。私もその中の一人でした。なのでこの話を授業で読めたことを、とても嬉しく思います。私の一番好きな場面は、せっかくじょうろの中

に隠れたピーターが、その中に水が入っていたために寒くなって、思わずしゃみをしてしまう場面です。ここでは、ピーターのおっちょこちょいでかわいいところが、すごく出ていると思います。」(奥園奈美)

「ピーターラビットはファンタジーであるが、読んでいると、本当にこんな世界があるような気がしてくる。今もその場所は存在し、そこへ行けば、彼らがいるような気がする」(重松秀治)

「ピーターには、フロプシー、モプシー、コトンテールというきょうだいがいて、母親がいるという家族構成になっています。この家族構成に、私は人間の世界にも存在する母子家庭を想像しました。お母さんが子どもたちに、マグレガーさんの庭にはいってはいけないと注意を促しているところや、ピーターに服を着せている絵などから、母親が、まだ小さい子どもたちを必死に育てている様子がうかがえます。それは人間の世界にもよくある光景なので、ひじょうに面白いと思いました」(小形矩正)

「私が不思議に思った絵は、ピーターたちが服をとりもどした後、マグレガーさんが帰ってきて、服のなくなったかかしを不思議そうに見ている場面の絵です。マグレガーさんの様子を、うさぎたちが上からこっそりのぞいています。そのうさぎを数えてみたら6匹いました。ピーターのきょうだいは、ピーターを合わせて4匹、ベンジャミンを合わせても5匹、あと1匹は誰なんだろうと思いました」(真弓佳奈)

『『ピーターラビットのおはなし』は、主人公のピーターの視点で描かれています。それは、人間である僕たちの世界ではなく、ウサギである彼の世界を体感することになります。僕たちには簡単に踏み越えられる階段も、彼にとっては大きな障害であり、僕たちが畑を守る網にひっかかっても難なく抜けられますが、彼にはクモの巣のようにむずかしく感じられるでしょう。でも逆に、僕たち人間が、見たり、触れたり、嗅い

だりできないことも、彼にはできます。不思議なことに、僕たちは自然にピーターの視点に合わせて読んでいます」(斎藤佳祐)

「ピーターがマグレガーさんに見つかった場面では、ピーターがやけに小さくかわいく描かれています。この部分は人間が、畑を荒らす動物を見つけたリアルな場面であり、すごく演出効果があらわれていると思います。絵がかわいいだけに、ピーターが追われていたり、猫に見つかってしまう場面では、ハラハラさせられたり、ピーターが泣いている場面では、かわいそうに思ったり、と感情移入できるところがこの本の魅力のような気がします」(田島梓沙)

「ベンジャミンは、ピーターと同じようにいたずら好きであるが、時には、ピーターの手をしっかりと握り、おびえるピーターを引っ張ったりして、年上っぽく頼りがいのあるキャラクターに見えるときがある。この姿と、父親にしかられて泣く可愛い姿のギャップが、ベンジャミンの魅力であろうと思う」(国松昌弘)

「p.9の真中の絵が、中でも一番印象的でした。この絵一つで、この話をよく知らなかった私でも、ピーターの性格がわかったからです。他のきょうだいたちとは違い、母親の言いつけを破ってやろうとそっぽを向くやんちゃなピーターが、私にはとても愛らしく見えたのです。また、この絵には背景がありません。これは人物だけを強調するためだと思います。作者はこの絵によって、場所がどうこうではなく、ピーターの家族は、お父さんが亡くなってしまい、4人家族であることを強調したかったのではないのでしょうか」(塚田夕子)

「僕はこの数ページの空想的な話を読んだだけで、毎日が混沌とした現実世界と折り合いをつけていきたいという欲求を感じるのです。ピーターとベンジャミンは、秩序を破るのに罰を受けず、その上、今日まで多くの人々に愛されています。その姿に僕は、自分の隷属的な生活との

争いの中で、勇気をもらうのです。僕のもがいている様と、ピーターの姿を少しだけ重ねてしまうのです。彼が大丈夫なのだから、自分も最後には笑顔になれるのだと」(田中俊行)

「p.25 のベンジャミンがピーターを発見した場面がいいと思った。ピーターの耳が少し出ている、ベンジャミンの足がピーターの上の方に描かれているので、すごくわかりやすい。動物を擬人化することによって、動物にもしっかりした動物の世界があることを、この物語は証明しているのだと思う。この物語は、そんな動物の生活の場である自然を、私たち人間は破壊しないで、動物の住みやすい環境を作っていくことが人間の使命ではないか、と私たちに投げかけていると思う」(山形由衣)